

雲雀 令和5年5月度特別作品

元宇品の散策 雲雀

まだ寒さの残る早春の日に、元宇品を訪れました。幼い頃の夏には何度も海水浴に訪れました。戦後の復興期だった十歳の頃には小学校の校舎が足りなかつたことや、毎日歩いて通ったことなど、この地には特別を思っています。実家の墓があり、今でも年に何度かは訪れています。原生林の面影を残した林の中に入ると、大木、高木が天空を覆い隠し、薄暗い空間もあります。また、近代的なホテルが建っている一方、戦時中の高射砲陣地や、防空壕の名残もあり、意外に思えます。灯台から海岸に降りると、遠き通った海水が打ち寄せており、穏やかに平和を今を感じたことでした。

古の人も眺めし椿かな

戦ひを思ひて眺む梅の花

一瞬は昔に戻る春の道

灯台に見下ろしてゐる梅の花

日の差せる広場の桜まだ固し

手袋を外して触るる楠大樹

囀りの下を通りて海岸へ

春の海水の揺らぎに見とれけり

春の浜風に向かひて歩きたる

のんびりとおむすびを食べ暖かし

《作品鑑賞》

暁子

美しい自然と戦時の名残りが混在している元宇品。幼い頃から幾度となく訪れたその地を、心のままに詠まれています。

戦ひを思ひて眺む梅の花

どれだけの兵士が宇品港から出征して行ったでしょうか。梅の花に彼らの悲しみが投影され、今の平和を申し訳なくも有難く思っている作者の心がうかがえます。

手袋を外して触るる楠大樹

四方に枝を張っている大楠、その息吹をじかに感じたくて、素手で触りました。大樹への畏敬が感じられ清々しい一句です。

春の海水の揺らぎに見とれけり

早春の光のなかの波はどこまでも輝いています。その揺らぎに見とれている作者の心に去来しているものは何でしょうか。「見とれる」で作者の心象を想像したくなりました。

村上理江 令和5年5月度特別作品

半径三キロメートルの発見 村上理江

隙間時間ができると、私は近所の散策へと出かけます。距離にして半径三キロメートル程度。ほんのわずかな空間ですが、歩く度に何かしらの発見があります。近くの幼稚園、小学校の子どもたち、通りすがりの庭に咲く花々、海から臨む対岸の街並、人々の営みを感じること、自分の生命の躍動を味わうことができます。ですから、今日もまた私は帽子を被り、新たな発見を求めて出かけるのです。

風吹けば鈴鳴る如き董かな

かはたれの鞆鞆雨に濡れるたる

藪の木の陰より初蝶飛び出づる

春風や自転車の子が進ひ越して

沈丁に誘はれ知らぬ路地裏へ

道行けば蕨の果てに初音かな

春雨や黄の長靴の登校子

花冷や対岸の灯の点き始む

園庭に数多飛びたる石鹸玉

隣家より夕餉の香り春の月

《作品鑑賞》

生活の中の小さな変化を楽しんでいる様子が目に浮かびます。毎日が冒険の探検隊のようです。今日は何を見つけたのか、教えていただきたくります。

風吹けば鈴鳴る如き董かな
董の小さく揺れる様子がなんとも可愛らしいです。乙女心を感じます。

かはたれの鞆鞆雨に濡れたる
鞆鞆に傘をさしてやりたくまりました。けれども、雨も優しく降っているようです。

隣家より夕餉の香り春の月

自分のうちの食事のことや、隣の食事の内容が気になってきます。不思議と隣家のことなのに自分のうちのことも思わせてくれます。出汁の香りがします。